

---

# 軍手少女

星椋歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

軍手少女

### 【Nコード】

N9630X

### 【作者名】

星掠歩

### 【あらすじ】

僕たちの学校のアイドル、北条峰音には秘密があった。偶然にもそれを知ってしまった僕は、奇妙な約束をさせられる。「同志になりなさい」

彼女には秘密があつた。

北条峰音は、僕らの学校のアイドルだ。容姿端麗、頭脳明晰、そんなお約束の言葉がぴったり当てはまる女の子がどの学校にも一人や二人はいるが、彼女はまさにそれだった。しかも、他の追隨を一切許さない。

僕はいえ、これまた絵に描いたような落ちこぼれ。顔も悪けりや背も低い。彼女に近づくなんて、いちアイドルオタクがトップアイドルに握手をしてもらうよりも難しいに違いない。同じホモサピエンスとは思えないんだ。

今日も僕は、たくさんの取り巻き女生徒たちと歩く彼女を教室の窓からぼーっと眺めていた。彼女が歩くと、それがどこであつても、いつの間にか大きな人だからができる。僕はその取り巻きにすらなれないモブの一人。平等な世の中というけど、やっぱりこういう格差って、埋まらないよな。

〃

それは、全くのアクセシントだった。

下校中に僕の乗る自転車がパンクした。

「ったく」

自転車屋に寄ると、店のオヤジが何かを探していた。

「あつれー、おかしいな、ここに置いといたのに」

「すみません、パンクしたんですけど」

「……あつ、いらっしやい。ああ、すぐ直るよ」

まあ、それはいい。そんなことはすぐに忘れてしまった。問題は、その後だ。

「えらく遠回りになっちゃったなあ」

自転車をこいで国道を進んでいると、前方に見慣れた制服の女の子が歩いているのが見えた。もう周りは薄暗いけど、あのポニーテール……あのすらりと伸びた足……間違いない。北条峰音だ。一人で歩いてるなんて、珍しいな。超ラッキーだ。僕は少しだけ自転車のスピードを緩め、それでも怪しくない感じに彼女のそばをゆっくり通り過ぎようとした。できれば、ちらつと横目で彼女の顔を拝められたらいいな、そんなことを考えながら。その時。

ぽとっ

彼女が何かを落とした。ほんの少し体がふらついたかと思うと、車道に何かを落としたのだ。僕はそれを見逃さなかった。彼女は気付いていない。

そうだ、これを拾って彼女に渡したら、僕は北条峰音と話ができるじゃないか。うまくいけば笑いかけてくれるかもしれない。それ以上は望まないけど、よしっ！

僕は彼女の落とした「それ」を拾い上げた。

汚い軍手だった。

「……なんだこれ」

まあ、いい。彼女のイメージとはかけ離れた落し物だったけど、とにかく北条峰音と話ができる。それだけで頭がいつぱいだ。

「ほ、北条さん」

「……あら、ええと、誰だったかしら」

北条峰音はいつもと同じだ。可愛い笑顔を僕なんかにも向けてくれた。

「あの……これ、落としたよ。はい」

僕は今拾った軍手を彼女の前に差し出した。

「あら……」

北条峰音の表情は変わらなかった。だけど

「ちょっと……そうね、こっちに来てくれるかしら。ほら、その駐車場。いいかな？」

国道沿いにある大きな薬屋の駐車場の端を指さした。  
な、なんだ？ これはお近づきになれる、ってことなのか？ いや、あまりにも展開が急すぎて……。

「うん」

断るわけではない。

彼女は静かに僕の前を歩く。自転車を引きながら後を付いて行く僕。何が起るんだ……。駐車場の端まで来ると、国道は全く見えなくなった。彼女は静かに振り返って、僕に言った。学校では見せたこともない、ものすごく冷酷な表情で。

「殺すわ」

カバンから大きなナイフを取り出した。どうやら……。本気？

「……………」

女の子は誰しも秘密を持っているという。彼女のそれが、この軍手だったのか。た、確かに……。汚い軍手と北条峰音は似つかわしくない。

「誰にも言いません……。ほんと」

情けない僕は命乞いをするしかない。

「いいえ、殺すわ……。私の活動を見たものを生かしておくわけにはいかない」

「……………活動？」

「あなた、私が軍手を落とすところを見たんでしょ？」

「見ました」

「殺すわ」

「勘弁してください」

活動って何だよ。軍手を落としたのはわざとだったのか？ 僕は混乱しながら、それでも冷酷な目つきで僕を見下ろす彼女が怖くて、命乞いを続けるしかなかった。

「何でもします。見逃してください」

「ふーん、何でもするのね」

「はい」

「……じゃあ、あなた、同志になりなさい」

「なります」

そう答えて、ますます混乱した。活動、同志？ なんかヤバい。

「明日早朝、同じ国道、私が落としたあの場所に、同志が現れます。活動を見たら入会希望を伝えなさい。いいわね？」

「はい」

いやいや、よくないだろ。北条峰音が何か怪しげな事をやっている。僕はそれに巻き込まれようとしてるんだ。どう考えてもまずい。

僕が考えていると、彼女はナイフをしまうと僕の手から素早く軍手を奪い取り、にっこり笑うと、いつものように落ち着いた足取りで僕から離れていった。

くく

そして国道に立つ僕。結局来てしまった。そりゃ、彼女とお近づきになれるんだから、こんなチャンスを逃す手はない。もうちょつとまともな友達になりたかったけど。

昨日の事を思い返していると、新聞配達バイクが僕の目の前を通り過ぎ、そして。

ぽとっ

何かを落とした。そのまま走り去っていく。あわてて落下物に近寄って見ると、そこには汚い軍手が落ちていた。

「あつ！ これじゃないか？」

僕は無意識にそれを拾い上げると、バイクを追いかけた。運動不足の僕にはかなりこたえるな、これ。もしかして入会テストか何かだろうか……。

「はあはあ……ぜえぜえ……」

バイクは民家の前で止まった。乗っていた人は新聞を持ってバイクから降り、小走りで玄関のポストに近寄っていく。僕はそのスキにようやく追いついた。

「ぜえぜえ……あの……入会……希望します」

バイクに戻ってきた人に話しかけたら、意外なことにヘルメットの向こうからの返事は女性の声だった。

「あら、新聞配達のアルバイトしたいの？」

「いえ……そうじゃなくて……こっちの方……」

僕は拾った軍手を見せた。

「あらあ、私ったら、落としちゃったのね。追いかけてきてくれて、ありがとう」

「いえ……」

「それじゃ……ね」

走り去るバイク。あれ、結局誰なんだよ。ヘルメットでわかんなかったけど、ただの新聞配達じゃないか……僕、からかわれたんだ、北条峰音に。うわああ恥ずかしい。僕は拾った軍手を握りしめた。

くく

北条峰音が放課後僕に会いたいという。下駄箱を開けて手紙を見つけた時は、最高に嬉しかった。いや、でも、昨日の事もあるし、正直いって喜んでいいのかどうかよくわからないな。

「あなた、私の言う事を無視するなんて、いい度胸してるわね」

屋上で二人つきりになると、北条峰音は昨日と同じ冷酷な表情になった。

「殺すわ、やっぱり。これはあなたが選んだことなのよ」

彼女は背後から何かを取り出そうとしている。物騒なものに違いなかった。

ええと、「冗談じゃなかったのかな？

「いやいや！ 僕はちゃんと行つたじゃないか！ ちゃんと伝えたよ！ ほら、これ、今朝拾つたし！」

僕が今朝拾つた軍手を見せると、彼女の態度が豹変した。明らかに動揺している。僕には何が何だかさっぱりわからないけど、新聞配達の落とす軍手を見てこんな反応を示す女子高生は、世界中を探しても彼女ぐらいだろう。

「あ、あんた！ それ！ イ団のものじゃないの！」

「へえ……何？」

「殺す！ 今すぐ殺すわ！」

何だよこれ、逆効果じゃないか。北条峰音は明らかに狂暴化した。もうためらいのない目をしている。僕は恐らく殺されるだろう。軍手のために。

「理不尽な」

そう思つたけど、仕方がない。僕は覚悟を決めた。その時。

「うちの新人さんに手出ししないでくださるかしら？」

北条峰音の後ろで声がした。ハツとして振り返った北条峰音のほつぺたを声の主が両手で挟む。

あつ、軍手をしているぞ。僕が今朝拾った奴と同じだ。

「むぐっ！」

「ほつら、今日は寒いわよ。私が手を引いたら、すごく痛いわよあ、くすっ」

輝くような長い髪をなびかせて、声の主が言った。その子が着てる制服、超お嬢様学校の青翠女学園じゃないか。

北条峰音と同等、いや、それ以上の超絶美少女のその子は、僕の方を向いて、にっこり笑いながら言った。

「今朝はありがとうね。ようこそ、私たちの秘密結社、『イボ軍手旅団』へ」

「はい……へ？」

「イ、イ団の回し者だったのね……うかつだったわ」

「くすっ、そうじゃないわ。私もこの子に今朝会ったばかりだもの。『ギョインター・アライアンス』の北条峰音さん」

状況がよく呑み込めないけど、とにかく僕の命は助かったみたいだ。助けてくれた美少女に、僕は一瞬で恋に落ちた。

「今日は下がりなさい、峰音さん。あなたごときじゃ、私にはかなわないでしょ？ くすっ」

「くっ……」

北条峰音はがつくりと肩を落とした。謎の美少女が両手をゆっくりと彼女のほっぺたから離し、一步、二歩下がる。去り際の北条峰音の敵意むき出しの視線が、僕には痛かったけど。

「よろしくね。私、イボ軍手旅団、通称『イ団』の六波羅御園ろくはらごゐのです」

「はい」

結果オーライだ。可愛い子と友達になれた。

でも……秘密結社って、何だろう。

〃

そんなこんなで、僕は今日もイボ軍手を道ばたに落としている。相変わらず北条峰音は何度も僕を殺そうとするけど、イ団のみんなのおかげで、何とか命拾いをしている。

「偉くなったら、私たちの活動の意味が分かるわ」

六波羅御園はそう言って笑った。まあ、彼女がそう言うなら、それでもいいさ。御園さんと一緒に活動は、それなりに楽しいし、充実してるしよ。

「おっ、ギョんターのやつだな。ったく」

僕は道ばたに落ちていた緑の縁取りがされた軍手を拾い上げると、ポケットに入れた。

(後書き)

なんでしょっちゅう道路に落ちてるんだろっなーと思って書き出したネタ

だけどオチがなかった、学園もの習作。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9630x/>

---

軍手少女

2011年10月27日03時08分発行